

災害に関する文書を読む 解答

史料 乙卯〔安政二（一八五五）年〕十月十二日

〔安政大地震江戸の様子二付書状〕

（林家文書No.八九八四）

追日寒冷相益候処、先以御安泰
奉忝喜候、先日者於途中
鳥渡得貴意候、其節も申上
候通り、古今稀成ル大地震
江都者殊ニ大変、諸侯方
過半打潰焼失等有之、御旗本
御家人町家寺院等府内ニ
無疵之家ハ一軒も無之よし
大城も所々破損有之、西丸
二重橋御櫓杯者潰候旨
三拾六之御見付渡乃櫓
御多門其外石垣等所々
大破之由、品川新築之
御臺場所々大破、二ノ
御臺場會津持武者溜り
潰レ焼失死亡之武士
十五六人有之由、御持之一ノ
御臺場も所々損し、石垣
三十間程くつれ、武者溜りも
よほとゆかミ候と申事ニ
御坐候、誠ニ古今未曾有
之大変、たとひ申さは
江戸中之家ごとニ大煩
ボンベン打こまれしも同様
之事と被存候

（中略）

出有之候よし、所々へ

御救小屋出来候由二
傳聞仕候、此外大變之
次第憫戚すへき事
嘆息スへキ事、憤慨ス
へキ事、難尽筆端二候
常陸帶之作者水戸
藤田虎之助様もうたれ
死二候よし、如彼ハ誠ニ
忠良之士、非命之死ヲ
遂ケ候事、天命是か
非か悲泣之次第二御坐候
此辺者潰家も無之、親族之内
死亡も無之候、誠ニ幸然之
至ニ存候、猶拝眉米夷
之情態日本海測量
致度旨、難題等拝眉ニ
万々御咄可申候、乍末
御惣容様へ可然御致聲
奉願候、已上頓首

十月十二日

沼田一齋

泰（花押）

林信海賢兄

硯所へ

【読み下し】

追日寒冷相益し候処、先ず以て御安泰
忝く喜び奉り候、先日は途中に於いて
鳥渡貴意を得候、其の節も申し上げ
候通り、古今稀成る大地震
江都は殊に大變、諸侯方

過半打潰れ、焼失等これ有り、御旗本、御家人、町家、寺院等府内に無疵の家は一軒もこれ無きよし大城も所々破損これ有り、西丸二重橋、御櫓杯は潰れ候旨三拾六之御見付渡の櫓御多門其の外石垣等所々大破の由、品川新築の御台場所々大破、二の御台場会津持武者溜り潰れ焼失、死亡の武士十五六人これ有る由、御持の一の御台場も所々損し、石垣三十間程くずれ、武者溜りもよほどゆがみ候と申す事に御座候、誠に古今未曾有の大変、たとい申さば江戸中の家ごとに大煩ボンベン打ちこまれしも同様の事と存ぜられ候

(中略)

出これ有り候よし、所々へ御救小屋出来候由に伝え聞き仕り候、此の外大變の次第憫戚すべき事嘆息すべき事、憤慨すべき事、筆端に尽くし難く候常陸帯の作者水戸藤田虎之助様もうたれ死に候よし、彼の如きは誠に忠良の士、非命の死を遂げ候事、天命是か非か悲泣の次第に御座候此の辺りは潰家もこれ無く、親族の内

死亡もこれ無く候、誠に幸然の
至りに存じ候、猶拝眉米夷
の情態日本海測量
致したき旨、難題等拝眉に
万々御咄し申すべく候、未乍ら
御惣容様へ然るべき御致声
願ひ奉り候、已上頓首

十月十二日

沼田一齋

泰（花押）

林信海賢兄

硯所へ